

〈講演〉

中国古代美術の海外流出

今日お話しするテーマは、「中国古代美術の海外流出」です。昨年一年間長期研修をいただき、そのテーマが、「中国古代考古美術資料の調査と研究」というものでした。中国のいわゆる文物が海外に大量に流れていますので、あまりヨーロッパに行ったことはないのですが、ヨーロッパの博物館を見てまわりました。何のために見るのかといいますと、博物館のものが、いつ中国で出土して、その博物館にいつ寄贈されたのかという情報に注目しました。そうすると、ヨーロッパにあるものが、元は中国のどこで発掘され、いつの時代のものであるのかわかってきます。歴史の資料としての価値が見出せます。

単に美術品として一級品で、これは非常に美しいとか、素晴らしき出来ということではなくて、むしろ、その形や物も大事ですが、それが歴史的にどういう意味を持っているのかというこの意味付けができるのです。そういう作業を一年間してきました。

訪れたところは、もちろん中国も含まれます。安徽省の博物館は

鶴間和幸

現在は安徽博物院と言います。ヨーロッパは、皆さんご存じの大英博物館、ここに中国美術、青銅器、玉器、陶磁器、書画など、一九世紀後半以降の個人の所蔵品を寄贈したものが大変多いようです。

ロンドンのオックスフォード大学の郊外にはアシュモolean美術・考古博物館があり、これは大変古く、一六八三年には成立しているという博物館です。ここにも、個人の寄贈の中国コレクションがあります。

ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館、これは一八五一年にロンドン万国博覧会が行われた直後に産業博物館ができ、それがもとになってサウス・ケンジントン博物館となり、その後、ビクトリア女王と夫のアルバート公の名前を取って、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館と改名され、ここにもたくさん中国から持ってきたものがあります。

パリに行きますと、何といってもエミール・ギメという人物のコレクションを集めたギメ美術館があります。長谷川正子さんという

司書の方にいろいろ伺いました。大変ありがたかったのは、展示品にある種の記号が付いていることを教えてくれました。ギメ美術館には、一九四五年にルーブル美術館にあるアジア美術のものを全部移管されています。ですから、今は、ルーブルに行っても中国の美術品はありません。

「MG」はギメ個人がもともと購入したコレクションであり、「MA」は一九四二年以降の購入品です。「AA」は、一九三二年から三九年、ルーブル美術館のアジア芸術部門がもともと持っていたもので、ギメ美術館に入ったことを示しています。それから、「EO」というのは、一九三二年以前のルーブル極東部門の所蔵品、これがギメの美術館に入っているということ、いわれを探る意味では、この「MA」「MG」「AA」「EO」というのは大変重要です。

同じパリに、セルニュスキ美術館があります。セルニュスキは実業家で、もともとイタリア人ですが、フランスに入りアジアの所蔵品を集めました。ここには大変重要なものが幾つかあります。

ドイツに行きますと、ドイツのケルンに東アジア芸術博物館、日本では、ケルン市立東洋美術館と呼んでいます。学習院大学の図書館を設計した前川國男が日本庭園と建物を設計しました。そこにアジアの美術品、もちろん日本の美術品も含めて所蔵されています。

北京に行きますと、これは、一九九八年に設立された博物館、保利（パオリ）という集団公司、国営の企業が博物館を造りました。

これは中国で初めてのケースです。保利芸術博物館にも行きました。この国営企業はいろいろな仕事をしています。海外で、いわゆる中国のある種の軍事産業に関係がある仕事をしていますので、そこ

で得た利益で海外に流出したものをお金で買い戻すということをやっています。ですから、この博物館にあるものは、どこで誰から買ったかという情報は全く表には出ていません。

北京では恭王府博物館というところへ行きました。ここは、清朝の皇族の妾訴という、西太后と同時期に、西太后と権力を二分したという清朝の貴族の邸宅です。大変広大な敷地が、今は博物館になっています。

そこには、いろいろな収蔵庫があり、今は、もう中にはないのですが、玉器を入れた部屋、磁器を入れた部屋、銅、錫という青銅器を入れた部屋などがあり、ここには、青銅器が二万五千九百七十三点、と言われています。日常品では、白玉の杯が一二〇、銀のお椀が三二、水晶の杯が一二〇、金を象眼した象牙の箸が二〇〇あったと記録されています。一九一二年、日本の山中商会がこの宝蔵庫の美術品を一括して購入して世界に売っていたという歴史があります。ロンドンのニュー・ボンド・ストリートには、山中商会のロンドン支店がありました。現在でも建物は残っていますので、写真を撮ってきました。

国家博物館はかつての中国歴史博物館で、天安門広場にあります。現在、海外所蔵の中国美術品に大変関心を持っています。先ほどの保利芸術博物館は、買い戻すという仕事ですが、こちらは、調査をして、大変豪華版の図録を作り始めています。大英博物館、ヴェイクトリア・アンド・アルバート美術館、そして、日本の住友の泉屋博古館の図録を作りました。それほど海外の中国文物に関心を持ってきているということです。

研修中に、日本の国内の美術館、博物館にも度々足を運びました。東京国立博物館の東洋館には、中国美術のコレクションがたくさんあります。例えば、そこに、唐三彩のコレクションがありますが、これは一九三二年、非常に早い時代に、横河民輔が個人で集めたコレクションを収蔵しています。

このように、いろいろなところを回ってきたのですが、個々の美術館を紹介していくよりは、一つの歴史の流れというものをまとめてお話しの方がよいかと思います。年表に従ってお話をしていきたいと思っています。

流出前史

まず、「流出前史」とは、一八世紀、一九世紀、まだ、ヨーロッパ人がアヘン戦争、そして、アロー号戦争で中国、北京に入り、そこで得られた文物を海外に持ち出す前の時代です。中国側では、乾隆帝が大変中国の文物に造詣が深く、いわゆる紫禁城、故宮に所蔵してある青銅器を調査して図録を作りました。「西清古鑑」という本が一七四九年に出されましたが、青銅器一五二九点の挿絵が載っています。伝世の中国青銅器は、これが漢の時代であったり、秦の時代であったり、唐の時代であったりします。そういうものを宮中で収蔵していたのが、清朝の特に乾隆帝の時代です。

ドイツでは、ポツダム、あのポツダム宣言を開催したポツダムにフリードリッヒ大王（在位一七四〇—一七八六）のサンスーシ宮殿があり、そこに中国の茶館（Chinesisches Teehaus）があるということを知っていましたので、そこに行きました。茶館の中は開放して

いませんでした。当時、ヨーロッパ人が、中国の文化に対して、ある種、崇拝する面がありました。それがシノワズリ（Chinoiserie）という考え方ですが、まさにフリードリッヒ大王も、中国のお茶をこの館で味わいました。何をもとにした建物であるのかまだ私も検証していませんが、少し怪しげです。この庭には、雍正元年（一七二三年）という雍正帝の元年の年号の入った青銅の香炉の台が一つ置いてありました。

これらは略奪品ではなくて、清朝から献上されたものです。茶館は、金ぴかの、この色合いがまたちょっと異様な色使いなんです、その屋根の頂上にあぐらを組んで、足を組んで、傘を持っている男性が座っています。で、また、顎には清朝人のひげをたくわえた人物の像が描かれています。シノワズリというのは、一七世紀後半から一九世紀、ヨーロッパ人は中国文化に対するある種の憧れがあり、それは、陶磁器であり、お茶であり、中国の家具でした。

大英博物館にも、パーシバル・デビッドの中国コレクションがあります。大変素晴らしいものです。それから、ヴィクトリア・アンド・アルバートミュージアムでも、陶磁器のコレクションは、ガラスの中に無造作に詰め込むように収められています。ヨーロッパ人は、陶磁器に対する収集を盛んに行っていました。

この時期の清朝の時代、出土品もあります。例えば、中国国家博物館の大孟鼎という大きな鼎です。清の道光年間（一八二一—一八五〇）に、陝西省郿県というところで単独で出土しました。その流布が、この国家博物館では説明されていたので、一つの例として大変興味を持ちました。郿県で出土したものが、いわゆる郷紳と

いう地元の退職官僚、科学官僚の地方の名士がそれを保持して所蔵していた。やがて、太平天国の乱を鎮圧し、西洋の軍事技術を導入した洋務運動でも知られる左宗棠という陝西総督になった軍人がそれを所有した。そして、何人かの手を経て一九五一年に上海博物館が取得しました。そして、また、一九五九年には、北京の歴史博物館に移管された。清朝の時代には、出土したものが、すぐ中央に献上されずに地方に残され、のちに博物館に入っていく。こういう流れが一つあるのかなと思われまふ。

① 一九世紀後半アロー号戦争後の清朝文物の流出

一九世紀後半のアロー号戦争（一八五六一一八六〇）後、清朝の文物が流出していた。英仏連合軍は北京を占領するという事態の中で、憧れであった中国の文物と出会います。ナポレオン三世（在位一八五二—一八七〇）の皇后のウジュニー・ド・モンティジヨという皇后の収集品が、パリの郊外のフォンテーヌブロー城という、もともと皇帝たちの避暑地であり、狩りの場所の城の中の一つの部屋にあります。

その中に、小さな看板があり、ミューゼ・シノワと書いてあります。そこには、中国博物館と漢語表記がしてあります。博物館にしては小さく、シノワズリの一つの中国趣味、皇后の部屋です。中国語でも説明がありましたが、はっきりとこれは英仏連合軍が北京に入ったときに略奪したものを展示してあると、フランス側は言っています。

実は、ここに最近泥棒が入って持っていかれたという情報があり

ます。わざわざそういうことを書くとは刺激するのでしょうか。戸棚には、実はすごくいいものがたくさんあります。七宝の類だとか、白磁のお椀だとか、白玉、翡翠、黄金製の壺も見られます。

北京の保利芸術博物館には、これは、レプリカの十二支、獣首人身像がありました。英仏連合軍が北京の円明園に入りました。円明園の西洋風の庭園に噴水があり、噴水には下半身は人間、頭は十二支の動物の銅像があります。これが時計式になっていて、時刻が来ると、その方向の動物の口が水を出す、そのようなからくりのあるものを作りました。それが略奪にあつて世界中に散らばったのです。保利は、これを香港のオークションで幾つか買い取りまして、今、本物が倉庫にあります。四つの水時計、豚、中国ではイノシシではなくて、十二支は豚です。そして、猿、虎、牛の頭像が並んでいます。このようなものを購入していくのが、この保利集団の博物館です。

この時期に、例えば大英博物館に一八八三年に寄贈された漢代の燭台があります。金・銀で作られた、台のところが金、そのほかは銀です。一八八三年と書いてある情報は、どう受け止めるのかというところ、これはまだ出土して、考古学的な発掘をしたものではないということですから、つまり、北京にあるどこかの宮殿や紫禁城か、どこかにあるものを海外に、ある種、略奪して持っていっただものかと思われるます。

ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館の所蔵品は、アロー号戦争で、英・仏の将軍たちが持ち帰ってロンドンでオークションをやり、オークションで入手したものです。ですから、同じ燭台は、い

わゆる伝世品と言って、地下から出土したものではありません。ですから、非常に色合いもよく残されています。

このようなものは、セルニウス美術館にもあります。青銅壺一八九六年に寄贈されたという情報があり、これも、考古学的な出土品ではなくて、伝世品をヨーロッパに持っていたということです。大英博物館の青銅製の動物は、一八八三年、一八八二年の収蔵品です。青銅で、金で象眼している動物をあしらったものです。

一つは何かの台の支えになっている動物です。もう一つはトラか、牛か、何か動物の、いわゆる闘争文様です。ですから、ここでは、ノーザンチャイナと書いてあります。左側は南中国、右側が北中国とも書いてあります。ああいう闘争文様というのは一般に北の中国で作られたので、そういう情報を書いたのでしょう。これも同じくセルニウスで一八九六年ですから、伝世品の鼎です。

私の話の中に、岡倉天心と、天心に付き添って中国に行った早崎稔吉、そして、その弟子である木村武山の話を所々入れていきます。というのは、私が海外の美術・文物に関心を持ったのは、天心の弟子である木村武山というお弟子さんが、大量に中国の文物を持っているというのを三年以上前から少し調査を続けているからです。

早崎は、一八九三年、岡倉天心と一緒に中国へ入りました。一八九三年に初めて岡倉天心と早崎稔吉は中国に入りました。三カ月かけて中国を旅行しました。そのときにいろいろな文物と出会っていますが、まだ、購入するという段階ではありませんでした。

早崎は、その後、東京の博物館や、ボストン美術館の仕事で中国に入って、北京の古美術商から、いろいろな書画、陶器、青銅器を

購入しています。そして、天心は、一九一三年、大正二年に亡くなりますので、天心のあと、彼は、細川護立などとの関係で、その早崎が入手したものが日本にもある。

②二〇世紀初頭義和団事件後の清朝文物の流出

次の時期は、二〇世紀初頭の義和団事件後の清朝の文物の流出です。アロー号戦争に続いて、一九〇〇年から一九〇一年、これは、欧米列強、日本も含めて、義和団という一種の民衆反乱があったときに、それを鎮圧するという名目で北京に入りました。

ケルンの美術館に布製の旗のようなものがありました。一九〇〇年から一九〇一年と書いてありますが、明らかに義和団事件に関係のある、何か記念品のような旗ですが、列強が北京に、四万五〇〇〇の八カ国の連合軍が入りました。彼らは、一年近く北京にいましたので、そのときに、またたくさんの文物を外に持ち帰りました。旗の数は、もしかしたら北京議定書には、ベルギー、オランダ、スペインも参加していますので、一一カ国が関係あるものかもしれません。

この時期に、虎^こと^こいう、大変面白いものがあります。虎^こと^こいうのは、青銅のお酒を入れる器ですが、取っ手があります。取っ手のあるものを^こと言います。トラの形をしているので、虎^こと呼びます。これがセルニウス美術館にあります。

セルニウス美術館のものは、辛亥革命後に流出したと言われています。ところが、これとはほぼ同じものが、京都の泉屋博古館にあります。これは、住友家が一九〇三年に購入したという記録があ

ります。ですから、一九〇三年に購入したということは、義和団事件直後に流出したことになります。

非常によく似たものですが、細かく比較してみると、全く同じものではないということに気付きました。青銅器というのは、同じものを作ろうと思ったら、粘土で焼いた型で作るのですが、いったんその中に青銅を注入したら、型を壊さなければなりません。またそのものから型を作って同じものを作るのですが、なかなか同じ大きさで同じものを作るのは難しいです。じっくり比べていったのですけれども、どうも同じ型で作ったものではないようです。

日本にあるものとヨーロッパにあるもの、これが、非常に密接な関係であるとうかがいます。で、流出といってもいろんなケースがあります。骨董商が購入したものを、先ほどの山中商会のように、それを購入品として海外の博物館が購入するというケースがあります。この二つを並べてみました。左側は私が撮った写真で、右側が泉屋博物館の図録から取ったものです。最初は、ほぼ同じものかなと思っていたのですが、そうではありません。トラの口の真ん中に人物の頭があり、左に顔を向けています。この人物の手がトラの口の両側にあり、トラの前足の爪が人物の背にあります。トラは後ろ足で立っています。この人物が、トラの口を開けた中に頭を入れるようなかたちです。

これには、いろいろな説があり、このトラは、トラに似ていないところがあります。ですからセルニスキの説明だと、母トラに似たネコ科の動物だと説明しています。なぜ母トラかという、一説に、子どもに乳をあげている姿であるとし、トラが子どもに乳をあ

げるという伝説をもとにしています。しかしどう見ても、この人物は、乳を飲むような子どもには見えません。

男の子かもしれませんが、足を、このトラの前足の甲のところに乗せています。しっかりとしがみついている。ですから、トラが人間を食べているという、いわゆる饕餮とうてつの語源に係る、人間を食べようとしているのだという説もあります。これは羅振玉の説ですが、しかし、どうも両方がお互いに情感を通じているような、非常にじやれ合っているような、そんな感じに私には思えます。

よく見ますとトラの牙が見えます。前の歯は、泉屋のものは比較的そろっている。セルニスキのものは少し欠けています。細かく見ると違うということがわかります。鏡の場合には、同範鏡という言葉があって、同じ鋳型から同じものを作る。いったん型を壊しても作るというのがあるのですが、これらは同範ではありません。

実は重要な情報は、湖南省で出土していることです。湖南省、泉屋のものは寧郷という県名までわかります。ですから、湖南省で、同じところで作ったもので、もしかしたら、泉屋のものの方が彫りが深くて精巧ですので、これを作ったのちに、これを基に、観察しながら、もう一つこれを作ったのかなと、そんな気がいたします。湖南省では、お墓の中から出土せずに、山の中にこういうものを埋めています。つまり、山とか川とか、自然を祭祀するときに、この道具を使ったと考えられます。殷墟などの北方では、被葬者の墓の中に入れるという使い方をしている。湖南省では、動物を丸ごと表現した青銅器が多いのです。

岡倉天心には四人の弟子がいますが、木村武山は、一番若い弟子

です。天心は、ボストンに行き、大英博物館にも行っています。その当時何を見てきたのか大変気になります。弟子の一人の下村観山は、イギリスに留学しましたが、木村武山は、北茨城の五浦に移って日本美術院で創作活動をしました。

武山は一九〇七年に阿房劫火という作品を描きました。武山の作品というのは、明治、大正、昭和と傾向が変わっています。明治時期には、歴史画をよく描き、大正になって静物画、そして昭和になって仏教画を描き、一九四二年に亡くなっています。

私が武山の作品で最初に変な興味を持ったのは、歴史画です。阿房劫火は、秦の始皇帝の阿房宮という宮殿が、項羽に攻められて焼かれるという場面を見事に描いた、大変に素晴らしい迫力のある作品です。でも、よく見ますと、なぜ武山は阿房宮を描けたのかと疑問を持ちます。阿房宮というのはどのような宮殿かわからないはず。作品をよく見ると、木造の建物があり、レンガ状の城壁があります。武山は、中国の現地を見ていませんが、早崎稗吉の写真を見えています。

早崎は一九〇五年に西安に行きます。西安は今でも明・清時代の城壁が残っている街です。早崎稗吉は古写真を撮っています。古代にはないレンガ造りの城壁と城楼の建物に火をつけて燃やしたのが、阿房劫火というふうに私は考えました。阿房宮の遺跡には何も残っていません。早崎も古跡より渭水を臨んだんだという写真を持っています。恐らく武山は明治の古写真を見たのだらうと思います。

③辛亥革命後一九一〇年代の清朝文物の流出

次の時期は、一九一一年に辛亥革命が起ったあとのことです。中国の近代史の混乱とともに、中国の文物が海外へ流出していきます。辛亥革命後の一九一〇年代に、清朝の文物が数多く流出しました。北京の故宮のある建物を見学しました。建福宮という建物です。ここでは、一九二三年六月に火災が起きました。今は建て直しています。この火災が起きたところが保存され、火災が起きたこの柱の上が炭になっています。

この一九二三年の辛亥革命後もラストエンペラー溥儀は、ここに住み続けていました。宦官たちが宮殿にあるいろいろな文物をこっそり外に持ち出して売っていたのです。そのことが発覚するのを恐れて、宦官たちがこの宮殿を焼いたと言われています。ここはもと乾隆帝の文物を所蔵してある宮殿でした。ですから、大変惜しいことに、火災でだいぶ紛失しましたが、その前に外に流れていました。

これは、ギメ美術館には巨大な青銅象があります。先ほど、動物を丸ごと表現した青銅器と言いましたが、これも、巨大な象です。殷の時代のもので、高さが六四センチ、長さが九六センチ、非常にかわいらしい象ですが、これはお酒を入れる容器です。大量の酒が入ります。背中のところに本来ふたがあるのですが、失われています。この像はアジア象のようです。

殷の時代は象の造形が非常に多く、殷墟の辺りにも、かなり象がいたようです。象形文字の甲骨文字の中にも象という字があります。インド象はインドにいるからインド象ですが、中国にも、在来象の

がどうやらいたようです。殷墟の婦好墓という女性の墓からも、玉で作った象が残されています。大英博物館には石で作った象もあります。

唐三彩の話をしたいと思います。これは、セルヌスキ美術館に打馬球の女俑の唐三彩がありました。一九一四年に寄贈されたという情報がありました。寄贈者の名前も記されています。

女性に馬に乗っている格好を見ると、女性もポロ競技という競技をしていたことがわかります。ヴィクトリア・アンド・アルバートミュージアムにも唐三彩の打馬球女俑がありました。あとから写真を撮ったものを整理してしましたら、ここにも非常に似たものがあったことに気づきました。台北の故宮博物院にも似たようなものがあります。唐三彩で女性がポロ競技をしているものです。

打馬球というのは、打球を打つ、スティックでボールを打ちながらするポロ競技のことです。ギメ美術館のものは唐三彩ではなくて、加彩という、焼いた上に絵具を塗ったものです。唐三彩は、うわぐすりに鉛を入れていますので、光沢がそのまま残ります。加彩俑は、光沢はなくなって、色もあせています。

ポロ競技というのは、馬の上では非常に動きがあるのですけれども、馬が全然動いていないのは奇妙です。ギメの加彩俑は、非常に迫力があって、七体の打馬球俑が、下に置けず、いわゆるギャロップ状態で駆けていますので、壁に貼り付けて展示しています。七頭が二つのチームに分かれて戦っているように展示していますが、ひっくり返せば同じ方向です。

唐三彩の発見は、実は、新しく、一九〇五年から一九〇九年に河

南省の汴洛鉄道^{べんろく}という、鄭州と洛陽の間に鉄道の敷設工事を行なったときに大量に発見されました。つまり、洛陽というのは、唐の時代の副都、副都であるわけです。長安のほかに、洛陽にも同じような都を置きました。ですから、唐三彩というのは、主に都で作られます。最近では、その窯元も発見されています。

唐三彩は一九〇五年から一九〇九年以降に博物館に入っています。東京の帝室博物館が唐三彩の壺を初めて購入したのは、一九〇九年ごろです。随分早い時代に日本にも入ってきたことになります。

一九一四年にセルヌスキ美術館に入ったというのは、そういうかたちで出土したものです。考古学的な発掘ではなく、土木工事によって発見されたものが売られていくということです。

木村武山が一九〇六年ごろに唐美人の絵を描いています。私は、何をモデルにしたのかな、なぜ唐の女性を描けるのかなと思います。別の画家は、唐美人と言いながら、漢代の女性のような姿で描いたり、ちょっと間違っているのですが、武山のは正しいのです。つまり、唐の時代の加彩女性俑というのがあります。それから、唐三彩は二〇世紀になって初めて出てきたわけですから、こういう唐の女性をちゃんと現代風に描いているものもあります。

漢代の女性は、日本の和服に近いのですけれども、唐の女性は、胸の開いたものを着ているというわけですから、恐らく武山は、どこかで、この唐三彩か加彩俑なのかわからないのですが、このようなものを見て描いたんだろうと思います。まだ突き止めてはいないのですが、年代からしてそうだろうと思います。

ケルンの美術館にはあまり参考になるものはなかったのですが、

一点だけ気になりました。殷の時代の男子の頭像です。殷のことは、中国では商といえます。一九一五年に西安で漢口に在住していたドイツ人が購入したというものです。殷の時代の大理石の頭の像は多分首から下もあったのでしょうか。このようなものがなぜ西安で骨董として出回っていたのかは謎です。先ほどの虎歯のトラの口の中に入っている男性と髪型がそっくりです。

④一九二〇～三〇年代の考古発掘草創期の流出

次の時期は、一九二〇年代、三〇年代です。実際に考古学的な発掘が始まりました。河南省の輝県というところで東周時代、すなわち春秋時代の墓が発見されました。一九三六年当時の発掘現場の写真が残されています。この時期に殷墟の発掘も始まりますが、正式な発掘と同時に盗掘が行われます。正式な発掘隊が入る前に流れていたり、あるいは、発掘が始まってからも横流しするようなことがあって、海外に流出しています。

北京の国家博物館の子龍鼎は、一九二〇年河南省の輝県で出土したもののという情報を書いてありました。子龍鼎というのは、子龍という文字の入っている鼎のことです。高さ一〇三センチメートル、直径八〇センチメートルの非常に大きな円形の鼎です。

情報によりますと、山中商会がこれを購入しました。ですから、発掘されたときに、骨董商が入手したのです。それがずっと日本の民間に隠されていました。千石唯司という方で、神戸、芦屋在住の電気会社をしている社長さんです。その方が購入収集した青銅のコレクション、鏡のコレクションは今に伝わっています。

子龍鼎が二〇〇七年に大阪美術倶楽部で公開されますと、みんなびっくりしました。中国側は、上海博物館の専門家を調査に派遣しました。結局、香港でオークションにかけられ、香港の人が購入し、最終的には、二〇〇六年に国家博物館がこれを購入しました。金額は忘れなければいけません、日本円で言うと何十億円でしょうか。それほど価値が付く大変なものです。非常に大きいということもあるんですが、文字が入っていることが価値を高めています。

東京国立博物館には、殷墟から発掘したと伝わっている白大理石の怪物の置物があります。これは、時々展示しています。

安徽省博物院には、一つの巨大な鼎があります。一九三三年に楚の王墓から出てきたものです。先ほど、鉄道の敷設工事で発見されたという話をしましたが、今でも、何か建築するために土地の調査をすると、墓に出会うことがあります。私も知らなかったのですが、ここでは水害が出土の契機になっています。安徽省の寿县では、一九三三年に大水害が起きました。寿县の城壁が二〇メートル近く水に没するような事態でした。そのときに、楚の王の幽王（在位前二三七―前二二八）という一番最後のころの王です。幽王、哀王、負芻と続き、負芻のときに秦に滅ぼされました。地下に墓を造りますが、そこからこのような出土品が露出したということで、盗掘されたりしました。最大級の円鼎です。先ほども最大級と申しましたが、楚の鈐客という鈐物の職人が製造したという大きい鼎です。これが展示されていました。

この横に、一枚の写真がありました。一九五八年に毛沢東が安徽省の博物館に訪れたときの写真です。いかにこれが大きいかわかる

ことがわかります。そのときに毛沢東が発した言葉があります。こんな大きな鼎だったら、牛一頭を煮ることができないのではないかと少し大げさですが、古代では、豚だとか、牛だとか、羊を煮て、先祖のためにささげる器で、下から加熱します。ですから、牛一頭を屠殺して、これで煮ることができないかと、毛沢東が言った言葉が大変印象的でした。

この鼎が発見されると、すぐに日中戦争が始まり、疎開します。故宮の文物も、まず南京に行って、その後、四川省に入ります。その文物と一緒にこの大きな鼎が四川省に入りました。日中戦争によって、北京にあった物が南京に移され、さらに四川省に入っていく。これは安徽省のもですが、一緒にこれが疎開したということも初めて知りました。

同時に発見された青銅の鼎が東京国立博物館にあります。伝安徽六安市寿県出土、一九三〇年代朱家集李三孤堆楚国大墓の出土と書いてあります。先ほどの一九三三年の水害による盗掘で出たものです。これは古美術商の坂本五郎氏の母親が東博に寄贈したものです。坂本五郎氏は、多くの青銅器を奈良の国立博物館に寄贈しています。

この一九二〇年代、三〇年代のものが日本にたくさんあります。永青文庫にある銀人立像は一九二八年に洛陽の金村という墓から出土したもので、これも大雨により遺跡が露出したのです。盗掘されて、これがC・T・ルーというパリ在住の中国系の骨董商が購入して、パリにいた細川護立が、そのものを見て購入したというものです。

夾紵大鑑きょうちゆうだかんは、先ほどの輝県で発掘され、大倉集古館が所蔵してい

るものです。今現在は、大倉集古館が工事中ですので、東京の国立博物館に委託展示されています。非常に大きな漆器の大鑑という大きな器です。そういうものが、ギメ美術館にもあります。一九二三年に山西省輝県李峪村などで出土したもののいくつもあります。これは、記号で言いますと、ルーブルのアジア美術部門が所蔵していたものですから、一九三三年から三六年に所蔵していたものです。一九二三年にはっきりと山西省で出土したものと書いてあります。

三つの、二頭の羊が背中を合わせている尊というお酒を入れる青銅器があります。大英博物館と根津美術館にあり、武山コレクションにもあるのですが、残念ながら、この武山コレクションにあるのは、こちらを似せて作った複製だということがわかってきました。

根津美術館と大英博物館と一緒に並べて展示したことがあります。若干違うのですが、造形の構成は同じです。これは、やはり湖南省で出土したものと推定されています。

ルーブルが入手してギメに移管されたものに、洛陽の金村で出土したものがありません。漆器の台に、青銅の怪物が支えています。一九二三年に洛陽金村で出土して、大雨によって盗掘され、海外に流出したものです。

ヴィクトリア・アンド・アルバートミュージアムで一九三六年に入手したもので、それ以上の情報はなかったのですが、のちに一九七七年、中国の殷墟にある小屯一八号墓から同じような、甗げんという、青銅の蒸し器で、下に水を沸騰させて、上がせいろになっているものが出土しています。これを参考にすると、ヴィクトリア・アン

ド・アルバートミュージアムのものも殷墟で出てきたものではないでしょうか。

一九三五年から三六年に、大変面白い展覧会をやっています。ロンドン中国芸術国際展覧会という展覧会、これは一つの基準になります。中国内外の全出品の目録があり、全部で三〇七九点の図版があり、小田部英勝氏からお借りしている大変貴重なものです。中国側は故宮博物院にある伝世品のほかに、出土したばかりのものを展示しました。河南省博物館で所蔵していた新鄭で出土したものです。それから、安徽省図書館、まだ博物館がありませんので、図書館が所蔵していたものです。これが先ほどの寿县で出土の青銅器です。

そういうものを、実は、最初は北京にあるものは一時期南京に移し、南京から英軍のサフォークという、巡洋艦に載せてロンドンまで運んだというものです。ロンドン側は、欧米にあるものを展示しました。その図録を見ますと、これは白黒写真ですが、大変役に立ちます。泉屋博古館の虎歯とセルニスキの虎歯が、同時に出品されています。日本からも、数は少ないのですが、永青文庫だとか、泉屋だとか、京都帝国大学とかが出品しています。ヨーロッパも出品しています。双羊尊も日英双方が出品しました。

どういうふうに並べたかはわかりませんが、ここで出合うわけです。ですから一九三五年、一九三六年段階に、こういうものが既にヨーロッパにあったという、チェックをする意味では大変貴重な図録です。

一九三四年、ルーブルからギメに移管されたものに、戦国早期の銅壺があります。これが大変面白いのは、ちょっと赤っぽいのです

けれども、青銅で作り、非常に細かく画像を銅だけの赤い状態ではめ込んでいます。象眼しているのです。金・銀を象眼するのではなくて、純銅を青銅の上に象眼している。そこには、画像は見えないのですけれども、陸戦とか、水戦とか、戦争の場面とか、それから女性が桑の木に登って、桑の葉を採る場面だとか、それからお祭りをしている場面とか、そういう場面が描かれています。

同じようなものが、保利の北京の博物館にあります。どこから入ってきたかわかりませんが、非常によく似たものです。多少形は違いますけれども、画像は似ています。ですから、そういうかたちで保利にあるものがどこから出てきたのかというのを探っていく面白さがあります。

ギメ美術館の青銅の剣です。ギメ美術館では、フランス語と英語と中国語で説明を表記していますので、大変助かります。一九二三年に、山西省の李峪村で出土した、金を象眼し、トルコ石をはめ込んだ銅剣です。こういうものが一九二三年に出土したとはっきり書いてあります。それがルーブルに入ってきたということです。

ギメ美術館の盤という器です。一九〇三年に住友コレクションに入っている、大戦後にフランスに入ったという情報ですが、この「MA」が、一九四二年以降にルーブルが購入したということです。

大英博物館の一九三一年に出土した庚侯銅簋です。河南省の浚県で出土した西周時代のもので、これが面白いのは、庚侯という周の一族が衛という国に封じられた、その諸侯の庚侯の銅器の器ですが、これと同じ庚侯の銘文が入ったものは中国にもあります。これは、実は里帰りして展示した際に、中国側で大変騒がれました。大

英博物館にある一〇〇の展示品から歴史をたどるという展覧会が日本でもまず開催され、それが北京にも行きました。北京の人たちがこれを目にして、ヨーロッパにも、同じ康侯の青銅器があるのだということを知ったわけです。それほど中国の人には関心のあるものです。

これも大変面白い、大英博物館が持っている、河南省浚県で一九三二年に出土した陶器です。東京国立博物館の東洋館にも類似したものがあります。東京国立博物館の説明では、春秋戦国期の彩釉壺で、絵の具で色合いを出していますが、模様を貼り付けているのです。溶けたガラスを陶器の表面に幾層にも貼り付けて装飾したものです。ガラス質成分が風化して白くなっているという、これが、中国安徽省の六安市寿県で出土したと伝えられているという説明です。この類似品が大英博物館にもありました。出土地は若干違うのですが、この画像の模様というのは、非常にギリシヤ的な文様が入ってきていると説明しています。ギリシヤ文化が早期に中国に入ってきているというので私も注目しています。

⑤日中戦争時期（一九三七～一九四五）の流出

寺内寿一という親子で陸軍大臣となった正毅の長男と木村武山が大変懇意にしていた。その関係で何か中国から文物が来ているのかなということをお話して終わりたいと思います。学習院大学史料館でも寺内家の文書や古写真の資料を寄贈され整理しています。

三六年来、武山は、寺内陸軍大臣のために武神像という神武天皇

像を描きました。寺内家にある写真が学習院大学の資料館に寄贈されています。木村家も二人の写真を所蔵しています。武山は武神像を随分たくさん描いていますので、この写真を見ると、大変二人が懇意にしていることがわかります。

寺内寿一は、一九三七年から三八年、北支那方面軍の司令官として北京に駐在しました。滞在中にある文物と出合います。大同を占領したときに、大同の石仏、つまり雲崗の石窟と出会います。それを何とか保存しないといけないということで、非常に親しくしていた末永雅雄という考古学者に相談します。そして、京都帝国大学のグループがここに入り、詳細な調査報告書をまとめました。

寺内寿一は、北京で戦災の被災に金一万円を寄贈したお礼として、傀儡政権の北京市の市長から西周時代の青銅の鼎を寄贈されました。これは、のちにオークションにかかって、寺内家から今は別のところへ行っているようです。その寺内が、時々、笠間の武山のうちを訪問しています。軍用便で、随分木箱を送ったという、武山の弟子の証言があります。

木村武山コレクション、かなりのものは複製品だということもわかってきました。学習院大学に寄贈されました写真、寺内司令官と副官が並んでおり、後ろに木箱があります。ちょっと木箱を逆さにして見ますと、二八部隊の高級副官贈という宛名が書いてあることがわかります。高級副官は服装から推定しても、八月から一二月の間に寺内は大同に入ったのかなと推測します。何を持ってきたのかはわからないですが、大同では、雲崗の石窟を視察しています。

武山は一九四二年に亡くなります。その前に、寿一は、頻繁に笠

間を訪れています。三十七年に大同の石窟で撮った写真もあります。
第二〇窟の前の写真です。

いろいろな武山コレクションの中に、京都大学の総合資料館と共有している大変面白いものがあります。紅山というところで発見された出土石器です。われわれも京都大学まで行きまして確認しましたけれども、たくさん石器の中に非常に共通したものがありません。もしかしたら、こういうものも寿一を通して入ってきたものかなと思います。

さて、北京の国家博物館に四頭の羊をかたどった尊という器があります。一九三八年に出土しました。私が中国文明の展覧会を二〇〇〇年に開催したときに、大変素晴らしいもので、展示しました。これは、全くの出来の悪い複製品です。やっぱり本物は、素晴らしいです。本物の青銅器のつくりというのは、大変迫力があって、われわれもくぎ付けになるものです。

以上紹介してきましたが、海外にあるもので、どこで出土して、いつ博物館が入手したものかというのを整理していくと、海外にあるものでも、歴史の資料として使えることがわかりました。中国のものが世界中に分散していますので、まだまだ調査が必要なこともわかりました。

【中国古代美術の海外流出関係年表】

流出前史

- * 乾隆帝（在位 1735～1795）
- * シノワズリ（中国趣味）chinoiserie 17 世紀後半～19 世紀初め 陶磁器・茶・家具
 - ボツダム・サンスーシ宮殿中国茶館
- * フリードリッヒ大王（在位 1740～1786）
 - 大盂鼎（1821～1850／陝西郿県礼村／中国国家博物館）

① 19 世紀後半アロー号戦争後の清朝文物の流出

- 1856 年 アロー号戦争、英仏軍出兵
- 1859 年 英仏軍北京を占領、文物略奪
 - バリ郊外フォンテーヌブロー城中国博物館
- * ナポレオン 3 世（在位 1852～1870）
 - 皇后ウジェニー・ド・モンティジョ（在位 1853～1870）
 - 円明園十二支猷首（保利芸術博物館）
- 1879 年 ギメ美術館、リヨンに創設
 - 金銀製前漢燭台（1883／大英博物館）
- 1888 年 ギメ美術館、パリに移転
- 1889 年 ギメ、中国訪問
- 1893 年 岡倉天心、早崎梗吉中国訪問
- * エミール・ギメ（1838～1918）
- * アンリ・セルニュスキ（1821～1896）
- * 岡倉天心（1863～1913）
- * 早崎梗吉（1874～1956）
- 1894 年 ギメ、中国訪問
- 1896 年 セルニュスキ遺品青銅器
- 1898 年 セルニュスキ美術館公開される
- 1899 年 ギメ、エドアール・シャバンスと中国訪問

② 20 世紀初頭義和団事件後の清朝文物の流出

- 1900 年～01 義和団事件
 - 虎卣（湖南寧郷／1903 年／泉屋博古館）
- 1905～1909 河南省汴洛鉄道敷設工事中に陶俑出土
 - 早崎梗吉古写真 西安城・阿房宮古跡（1905）
 - 木村武山 唐美人（1906 頃）、阿房劫火（1907）
- 1906～1907 年 岡倉天心中国美術品収集
- 1909 年 東京帝室博物館はじめて唐三彩の壺を購入
- 1910 年 岡倉天心ボストン美術館中国・日本美術部長

③ 辛亥革命後 1910 年代の清朝文物の流出

- 1911 年 辛亥革命
 - 象形尊（湖南／1911 年／ギメ美術館）
- 1912 年 山中商会、恭王府の美術品購入
 - 恭王府博物館
 - 岡倉天心収集（1912／ボストン美術館）
- 1914 年 ギメ、ヴィクトル・セガレンと中国訪問、セガレン始皇帝陵を撮影
 - 打馬球女俑唐三彩（1914 年／セルニュスキ美術館）

○大理石男子頭像（1915／西安／ケルン東アジア芸術博物館）

④ 1920～30年代の考古発掘草創期の流出

- 1920年 ○子龍鼎（1920年代／河南省輝県／山中商会）
○双羊尊（湖南／1920年代／大英博物館・根津美術館）
○虎卣（湖南／1920／セルニウス美術館）
- 1923年 故宮建福宮大火（故宮文物の流出）
山西省渾源県李峪村で暴風雨によって大量に青銅器・玉器が発掘され、海外に流出する。
河南省新鄭県李家楼で旱魃時に井戸を掘り鄭国の古墓露出
○西周青銅盤（1923／大英博物館）
- 1926～1929年 梅原末治、欧米流出の青銅器調査
＊細川護立購入（1926～1927）
- 1927年 河南省博物館設立
- 1928年 河南省安陽の殷墟発掘（～1937年）と流出
○饕餮文紋方盃（伝殷墟出土／根津美術館）
○大理石製動物（1937／大英博物館）（東京国立博物館）
○甌（1965／大英博物館、1938／V&A博物館）
河南省洛陽金村で大雨によって盗掘され、出土品が海外に流出する
（ルーブル美術館、永青文庫）
ギメ美術館国立美術館となる
＊木村武山 鴻門の樊噲（1930／野間美術館）
- 1931 満州事変
故宮文物上海へ移送
- 1932年 河南省浚県辛村で衛国貴族墓発掘
○康侯銅盃（1931 浚県辛村出土／大英博物館）
横川民輔陶俑コレクションが帝室博物館に寄贈され始める
○嵌紅銅礼射宴飲狩猟紋銅壺（1934／ルーブル美術館）
- 1933年 安徽省寿県で水害、李三孤堆楚幽王墓盗掘
○鑄客大鼎（1933／安徽博物院）
○蟠螭紋鼎（1933／東京国立博物館）
- 1935年 6月 上海からロンドンまで展覧会文物運搬（英国軍艦 Suffolk）
ロンドンで中国芸術国際展覧会開催（11. 28～36年）
- 1936年 河南省輝県瑠璃閣で東周墓発掘
湖南省長沙小吳門外楚墓で越王州句劍出土（アメリカ・フォッグ美術館）
○越王州句劍（1947／大英博物館）越王矛（大英博物館）
○金象嵌越王銅矛（永青文庫）

⑤ 日中戦争時期（1937～1945）の流出

- 1937年 7月7日 盧溝橋事件
＊寺内寿一 北支那方面軍司令官（1937. 8～38. 12）
○木村武山コレクション 石器・青銅器・玉器
○四羊銅方尊（1938／湖南／中国国家博物館）
- 1939年 故宮文物四川省へ移送
- 1945年 故宮文物南京に移送
ルーブル美術館のアジア美術がギメ美術館に移管

